

第1回（仮称）

第3次都心まちづくり計画検討会

議 事 録

日 時：2024年6月6日（木）午後1時開会
場 所：札幌市民交流プラザ 2階 SCARTSスタジオ1・2

1. 開 会

○事務局（伊関都心まちづくり課長）

定刻となりましたので、ただいまから第1回（仮称）第3次都心まちづくり計画検討会を開催いたします。

本日は、お忙しい中をご出席いただきまして、誠にありがとうございます。

私は、事務局を務めます札幌市まちづくり政策局都心まちづくり推進室の伊関と申します。本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

◎挨拶

○事務局（伊関都心まちづくり課長）

それでは、開会に当たりまして、札幌市まちづくり政策局長の浅村よりご挨拶を申し上げます。

○浅村まちづくり政策局長

札幌市まちづくり政策局長の浅村でございます。

今日お集まりの委員の皆様におかれましては、日頃より、都心のまちづくりのみならず、市政運営全般にご助言、ご協力をいただきまして、誠にありがとうございます。

また、このたび（仮称）第3次都心まちづくり計画検討委員会の委員をお引き受けいただきましたこと、本当に感謝申し上げます。また、本日は、ご多忙の中をご足労いただきまして、大変ありがとうございます。

本検討会につきましては、来年度末に予定しております（仮称）第3次都心まちづくり計画の策定に向け、その内容につきまして委員の皆様からご意見をいただく場として開催するものでございます。

本市におきましては、都心における中長期的なまちづくりの在り方、将来像を示します都心まちづくり計画を2002年に初めて策定いたしまして、その後、改定を重ねながらまちづくりを推進してまいりました。

このたび、本市の上位計画でございます第2次札幌市まちづくり戦略ビジョンが、昨年度、2023年に策定されたこと、それから、第2次都市計画マスタープランが2025年中に改定を予定していることを受けまして、都心まちづくり計画につきましても併せて見直しを行う必要があるという考えの下に検討を進めております。

加えまして、現在、都心におきましては、1972年の冬季オリンピック開催時前後に建設された多くの建物が更新時期を迎えている中、北海道新幹線の札幌延伸開業時期の延期ということが取り沙汰されておりますけれども、この影響もできるだけ抑制いたしましてまちづくりを進めていくという視点が必要だと考えております。

さらには、居心地がよく歩きたくなるまちづくりの推進や脱炭素社会の実現に向けたより強力なエネルギー政策、一昨日に指定を受けましたGX金融・資産運用特区の取組などが求められる中、世界の中の札幌として新たな都心の役割やビジョンというものを示していくべきと認識しております。

しかし、これらは札幌市単独では解決できない課題でもございまして、市民の皆様、企業の皆様、関係する団体、行政機関の皆様と協働を進め、引き続き、まちづくりを加速させていくことで、先人が築き上げてきたこの魅力的なまちを引き継ぎ、受け継いで、将来にわたっても持続、発展させていきたいと考えております。

改めまして、この検討会では、委員の皆様には事務局が提示いたします見直しの方向性や案について過不足がないかどうか、また、将来的な観点を踏まえているかどうかにつきまして、専門的な視点からご意見をいただきたいと考えております。

本日は、皆様の忌憚のなきご意見、そして、闊達なご議論をいただきますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

◎資料確認

○事務局（伊関都心まちづくり課長）

それでは、本日は第1回の検討会でございますので、座長の選出までの間、私が進行を務めさせていただきたいと存じます。よろしくお願いいたします。

まず初めに、配付資料を確認いたします。

お手元に配付いたしました資料は、A4判の1枚物の次第、資料1の座席表、資料2の（仮称）第3次都心まちづくり計画検討会委員名簿、資料3の（仮称）第3次都心まちづくり計画検討会設置要綱、また、資料4として左上のホチキス留めになっている第1回検討会資料、資料5として第1回都市計画マスタープラン等見直し検討部会資料です。

以上ですが、不足がございましたらお教えいただけますでしょうか。

2. 委員紹介、事務局紹介、座長選出

○事務局（伊関都心まちづくり課長）

続きまして、委員の皆様を名簿順にご紹介させていただきます。お名前を読み上げますので、ご着席のまま、ご一礼をいただければと存じます。

北海道大学大学院農学研究院教授の愛甲哲也委員です。

北海商科大学商学部観光産業学科教授の池ノ上真一委員です。

本日はオンラインでのご参加でございますが、北海道大学大学院工学研究院非常勤講師、一般社団法人新渡戸遠友リビングラボ理事長の小篠隆生委員です。

北海道大学大学院工学研究院土木工学部門教授の高野伸栄委員です。

千葉大学大学院工学研究院教授の村木美貴委員です。

三井不動産株式会社北海道支店支店長の東幸治委員です。

三菱地所株式会社執行役員の井上俊幸委員です。

札幌駅前通まちづくり株式会社代表取締役社長の内川亜紀委員です。

Local Knowledge Platform合同会社エグゼクティブディレクターの榎本拓真委員です。

独立行政法人都市再生機構東日本都市再生本部副本部長の後藤正也委員です。

札幌大通まちづくり株式会社代表取締役社長の島口義弘委員です。

日本政策投資銀行北海道支店次長三浦幹央委員の代理でご出席いただいております日本政策投資銀行北海道支店企画調査課兼業務第二課長の中山達揮様です。

最後に、オブザーバーとしてご参加いただいております北海道開発局札幌開発建設部都市圏道路担当次長の草野真一様です。

なお、札幌市立大学デザイン学部准教授の片山めぐみ委員、札幌商工会議所総務委員会委員長、池田食品株式会社代表取締役社長の池田光司委員、札幌商工会議所都市・交通委員会委員長、北都交通株式会社代表取締役の渡邊克仁委員の3名につきましては、本日も欠席となっております。

続きまして、事務局を紹介させていただきます。

本会議の事務局を務めます札幌市まちづくり政策局都心まちづくり推進室でございます。

また、検討会の運営のご支援をいただきます、本市の委託業務の受託者でございます株式会社ノーザンクロスでございます。

続きまして、座長の選出に移りたいと存じます。

配付資料3、設置要綱第5条におきまして、検討会に座長1名を置き、委員の互選によりこれを定めることとしております。

候補者につきましては、立候補あるいは推薦等はございませんでしょうか。

○高野委員

千葉大学の村木委員におかれましては、都市計画に精通しておられますし、前回の都心まちづくり計画と都心エネルギープランの両方に携わっておられますので、村木委員がよろしいかと思えます。

○事務局（伊関都心まちづくり課長）

ありがとうございます。

ただいま、村木委員を推薦するご意見がありましたが、皆様、いかがでございましょうか。

賛成なさる方は拍手をお願いいたします。

（「異議なし」と発言する者あり）（拍手）

○事務局（伊関都心まちづくり課長）

皆様のご賛成をいただきましたので、当検討会の座長は村木委員にお願いすることいたします。

村木委員は、座長席へのご移動をお願いいたします。

〔座長は所定の席に着く〕

○事務局（伊関都心まちづくり課長）

それでは、村木座長から、一言、ご挨拶をお願いいたします。

○村木座長

千葉大学の村木と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

千葉から北海道に通ってきておりますが、もう20年近く札幌市の計画づくりに携わらせていただいて、札幌のこともかなり詳しくなったかと思います。先ほども話をしていましたが、冬にこちらで骨折をしたこともございました。

いろいろな北海道の魅力を活かし、札幌がよりよくなっていくために、今度はこのように都心まちづくり計画とエネルギーの計画が一緒になるということで、脱炭素で価値の高い都心ということができるような計画になるように、皆様、どうぞご協力をいただければと思います。

ご意見をたくさん頂戴したいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

挨拶に代えさせていただきます。

○事務局（伊関都心まちづくり課長）

村木座長、ありがとうございます。

なお、報道各社の皆様におかれましては、この後の写真、映像等の撮影はご遠慮いただきますよう、お願いいたします。

また、本日の検討会につきまして、個人に関する情報など非公開情報を除き、会の次第、出席者氏名、発言者等を記載しました議事録を作成し、公表する予定でございます。何とぞご了承いただきますようお願いいたします。

それでは、以降の会議の進行については、村木座長にお願いしたいと存じます。

村木座長、よろしくお願いいたします。

3. 第1回検討会資料説明

○村木座長

それでは、早速、議事に入らせていただきます。

次第に従いまして、事務局から資料のご説明をお願いいたします。

○事務局（杉原推進担当係長）

それでは、お手元の資料または画面をご覧くださいと思います。

〔事務局より資料説明〕

なお、本日ご欠席されております、池田委員・渡邊委員については事前に資料説明を行い、ご意見を伺っておりますのでご紹介させていただきます。

まず、札幌商工会議所 総務委員会委員長 池田食品株式会社 代表取締役社長 池田光司委員からのご意見として3点、ご紹介させていただきます。

一点目は、気候変動対策に対して。北海道ではもっと、自然環境を保ち、豊かな土壌を作り、生態系を利用することで、脱炭素化への貢献ができるのではないかと考えている。都心に対しどこまで影響があるかは把握できていないが、周辺でそのような場があれば都心のエネルギー消費も節約できるのではないだろうか。

次に、経済の視点でのご意見としまして、都心にはスタートアップエコシステムが必要だと思う。ただし、IT系だけではなくて、老舗の企業も含めた様々な企業を巻き込んで、札幌の地域特性を生かし、潜在しているものを引き出し、札幌の中で産業が循環する仕組み、ビジネスが広がる仕組みを作っていくべき。企業が生き残るためには、研究など必要な期間もある。そのときの研究の相手、権利関係、資金関係等様々な相談窓口がワンストップであるといい。企業だけでなく、教育など、住む人にも需要のあるエコシステムを増やしていくことも必要。

最後に、ソフト面での取組に関して。NYのセントラルパークではアンデルセンの銅像の前に語り部がいて、結構な人数の人が耳を傾けている風景を私も実際に見て、そこから新しい物語が生まれていくと思った。札幌の都心でもそういう活動が広げられたらいいと思う。大通公園のイサムノグチの滑り台にも、物語的な要素を付け加えることでより人を引き付けられると思う。点在するものに付加価値をどうつけていくかが大事になると思う。

続きまして、札幌商工会議所 都市・交通委員会 委員長 北都交通株式会社 代表取締役 渡邊 克仁委員から、主に交通の視点でご意見を頂戴しておりますので、ご紹介させていただきます。

この計画が20年先を見据えるということなら、自動運転が実現している世界をイメージすべきではないか。

例えば新幹線が来たら、創成東は車を入れずに、自動運転と自転車と、貨物車両のみとするエリアにするということもありうるのではないか。また自律分散型信号機を導入し自動運転と信号機を連動させるシステムを札幌市が他地域に先駆け独自に開発してはどうか。碁盤の目だから札幌の都心はやりやすいと思う。

車は発進時が一番CO2を出すので、都度停まらないだけでもかなりCO2削減に貢献できる。渋滞の解消も、今後は、道路や橋などハード整備を主眼にするのではなくマネジメントで解決すべき。何かを作ると除雪もメンテナンスも必要になるが、今後人も車も増えないのだから。

交通事故のない社会にしたいし、CO2削減ももっと危機感を持たなければならない。子供たちのためのまちづくり、次世代に何を残してあげるかを考えなければならない。

以上、2名の委員からのご意見をご紹介させていただきました。

4. 意見交換

○村木座長

今までどのような計画を作られてきたのかといったご説明だったと思うのですが、ここから意見交換に移らせていただきたいと思います。

本日は、14ページ目にご議論をいただきたいこととして2点挙げられていますが、今

後20年で札幌の都心が目指す姿、将来像を描くに当たり必要な視点について、より実効性のある計画にするために必要な視点について、ご意見をお伺いしたいと思います。

初回なので、申し訳ないのですが、お一人ずつ自己紹介も含めてご意見を頂戴できればと思います。

最初に、途中でご退出されると伺っておりますので、島口委員からお願いできますか。

○島口委員

札幌大通まちづくり株式会社の島口でございます。

今ご紹介がございましたように、我々は大通地区を中心にいろいろなマネジメント、調整をしているのですが、論点が広いので、今回は絞ってお話をさせていただきたいと思います。

まず、全般的な話というよりも論点自体の最初の考え方として、9ページにありますとおり、札幌市は少子高齢化が進むまちでございますので、人口は減る、需要も減る、内需も減るとしたときに、この都市はどうやってこのまま生きていくのかと云ったら、観光というものをきちんと捉えないと、その後の20年というのは語れないというふうに思うのです。要は、外資を稼がないとこのまちの潤いを生まないというところもあると思います。しかし、今までの資料の中で観光という文字は2か所しかない。

本来は、成長産業として考えるのであれば観光は大見出しの一つに入っていなければいけないのですけれども、そういう意味では視点がちょっと違うのではないかと思います。

もちろん、今いる人たちのためのまちづくりということも考えればいいのですけれども、逆に、外部から来る人たちをもてなす、それから、満足をさせるまちをきちんと作っていくということは柱としてきちんと立てていかなければいけないので、ここが違っていると私は思います。

今、ご覧のとおりですけれども、オリンピックこそはなくなりましたが、新幹線が来て、そして、いろいろな投資が出て、不動産も動いていますし、ホテルも動いていますし、いろいろな形でこのまちを魅力的に考えているのは誰かと云ったら、やはり観光で来る人たちです。ターゲットに合わせてこのまちの魅力をもっていろいろな投資をかけているということですから、そういうことからすれば、本当にここを重要に考えていかなければいけないと思います。

実際に、交通の問題もそうです。新幹線を降りてからの行動計画、先ほど自動運転などもありましたけれども、どういうふうなまちづくりの中で観光客の方々をどういうふうに運ぶか、その方をどうしていくのかということを中心にきちんと論じないと絶対におかしいというふうに思います。

現状はコロナ禍明けの中で、コロナ禍前の状態のように稼いでいるのは観光の分野だけなのです。それ以外の消費は100%が限界でして、それを超えているのは全て観光需要です。特に、皆様もご覧のとおり、インバウンドを含めて記録的な円安という追い風もありますけれども、消費と行動はその辺が大事ということでございます。変に偏って言って

いるわけではないのですけれども、これはきちんと柱として考えたほうがよいです。

また、観光は都市間競争です。このまちが飽きられれば違う都市に行ってしまう。そういう意味では、このまちが魅力的であるがゆえに、もちろん今までのプランの中の計画や今までやってきていることは今までどおりで構わないかと思います。ただ、方向性的に考えて、もちろんGXを含めた新しい産業という形の分野は別にありますけれども、基本となるものは、札幌は観光都市とよく言うのですが、何にも手をつけていないところがありますので、ここは考え方を変えて、まちづくりの上で観光需要をどう取り込んで、その人たちをどうしていくのかというところをきちんとやらないと20年後の姿は描けないと私は思っています。

そういうところをきちんと大事な形で考えていく方向性ということでは、ぜひ、論点の最初のスタートとして、この部分に重きを置いてお考えいただけたらありがたいなということで、私からのご意見とさせていただきます。

よろしくお願いいたします。

○村木座長

まちづくりと観光を重ねるとどうなのかという、すごく大事なご意見だったと思います。

それでは、名簿順にご意見を頂戴できればと思いますので、愛甲委員からお願いいたします。

○愛甲委員

北海道大学の愛甲でございます。

私は農学研究院に所属しておりますので、専門は造園と書いていただいています。緑に関係することもちろんやっておりますので、その観点で目指す姿などの必要な視点についてお話しさせていただこうと思います。

札幌は、この中にも何人か委員の方に入っておりますけれども、一昨年度、都心のみどりづくり方針というものを作ったり、その前にはみどりの基本計画の見直し、更新もしました。その中でも、都心は緑についてきちんと位置づけをして、緑づくりをやっていかなければいけない、また、今残っている緑をきちんと残していかなければいけない場所という位置づけもしています。

札幌市は緑が豊かなまちと言われる一方で、都心部を見ると実はそれほどでもなく、実際に調べてみると、緑被率や実際に目に入る緑の量がそうでもないのです。これは、まちの構造が基盤の目の道路をしているので、視線を向けたときに丁字路が少ないですから緑のほうが少ないというような構造的な問題ももちろんあるのですけれども、緑が多いところというと大通公園や中島公園、それから、北大の植物園などであって、沿道は意外と緑が少ないということも指摘されているところです。

そういった部分を充実させるということももちろん必要ですし、今後20年を考えると確実に気温は上がっていくわけで、それに対して対応していくことが必要なわけです。最

近は札幌でも夏は非常に暑いです。

実は、昨年、一昨年ぐらいから私どもの研究室で都心部の緑地の利用状況というのを調べていて、民間の空地を含めて街路を歩かれている方々がどういうところに立ち止まったり座ったりしているかを調べてみたのですけれども、非常に暑いときは、民間の建物のところに作られている空地で休憩をしたり、ちょっとした信号待ちのときにもそういうところにさっと入って日陰で信号待ちをされる方が非常に増えています。これまでそういうことを札幌で意識することはあまりなかったのですけれども、必要性が増すだろうと思います。

もう一つは、気候変動によって、北海道にも台風が結構来るようになりましたし、雨が結構降るようになると思いますので、雨水のコントロールです。大通公園などの一部で実験をやっていますが、雨庭と呼ばれるような雨水を公園や街路の植ますなどで取り込んで処理するようなことも都心部ではますます必要になってくるのではないかと考えています。

また、今、大通公園と中島公園の将来的な再整備を見据えての在り方検討会というものをやっています。

その中で一つ議論になっているのが、今もYOSAKOIソーラン祭りをやっていますが、都心の中にある公園は非常にイベントも多くにぎわいがあるのですが、その一方で、都心に居住される方も最近増えてきている中で、そもそも公園緑地が居住される方々のために果たすべき機能、落ち着いて緑の中で散歩をしたりリラックスしたりというような機能とどうやってバランスを取るかということです。

にぎわいと居住されている方のバランスをどう取るかというのは非常に大きな問題になっているので、先ほど島口委員が観光の話をされていましたが、これからそこはますます充実していくというか、オーバーツーリズムの問題も逆にありますので、そこは必要な視点かなというふうに思いますし、非常に長い間にわたって維持されてきた大きな公園で都心の中にありますので、歴史性も大事にしていかなければいけないというようなことも一つの視点になるかと思っています。

○池ノ上委員

池ノ上です。

先ほど島口委員から観光のお話もありましたし、私も一応観光が専門ということで入らせていただいているので、観光のお話をしたいと思います。

私も常々申し上げているのですけれども、観光の再定義が必要だろうと思っています。特に、まちづくり側というか、地域側から考えたときに、観光というのは、今までどちらかというと不安定で脆弱で、この間のコロナ禍も含めてですが、当てにならないものであるというところで、まちづくりの分野ではあまり評価をされていないところがあると思います。

観光研究の一つの対価といいますか、先進的にやられているジョン・アーリがモビリティーズという定義で話をしていますが、観光というのは、日本で今捉えられているよう

な宿泊や運輸、旅行業のような話だけではなくて、そもそも人が動いたり、先ほど外貨という話もあったと思いますが、それに伴ってお金が動いたり、あるいは、異文化交流みたいな文化が動くなど、地域間の交流によっていろいろな地域の変容といいますか、ダイナミズムみたいなことが起こってくるもののほうが重要ではないかということです。

地域側から考えると、観光を定常的に進めていくための装置化みたいなことが重要です。一般的に言うと、高野委員がご専門だと思いますが、例えば交通計画にしても、今まではいろいろな人や物の移動に関して生活者目線で計画が立てられてきたと思うのですが、現代においては、グローバル化みたいなことも含めて人の移動というのは世界的な規模で動くようになっているので、それを見越した上で、地域側でインフラ整備や建設、不動産も含めて観光戦略を立ていかなければいけません。それをきちんと地域として装置化していくということが今まで足りていなかったことです。

まさに、その部分を含めて、観光をしっかりと視野に入れた中での経常的な動きにどう持っていくかという装置化という話と、オーバーツーリズムみたいな話もありますので、地域としてその動きをいかにマネジメントしていくかというキャパシティの話、また、域内波及効果みたいなこともとても重要になってくるので、それを地域の中でどう最大化していくかというマネジメントが重要ではないかと考えています。

一方で、観光が見せ物化していく、あるいは、先ほど申し上げたように短期的に投資が動くとか外部資本が入りやすいという悪い意味でのグローバリゼーションみたいなことも起こりがちです。そうすると、地域で人がたくさん動いているのに地域の経済的な収益は全然上がっていかないとか、何かするとすぐ引き上げてしまうみたいな話もあって、逆に言うと、都市がスポンジ化していくのを後押ししてしまうみたいなのところもあるのかなと思っています。実際、ホテルがたくさん外部資本によって建てられたみたいなのところは、札幌の課題でもあるのかなと思っています。

そう考えると、では、自分たちの地域の中での域内波及みたいなことをどう高めていくか、自分たちのキャパシティをどう捉えてどうマネジメントしていくかのためのまちづくり、都市づくりをどんな戦術で進めていくのかということが重要になってくるのかと思っています。

先ほどのインフラ産業や建設業、不動産業もそうですし、宿泊してもらったけれども、その人たちにどうやってお金をさらに落としてもらうのか、宿泊税で公的な再配分で解決するような方法ももちろんあるのですが、それだけだと都市の力にはなっていないので、訪れた人にいかに地域の中でお金を落としてもらえるかという産業育成のようなことも重要になってくるのかなと思っています。

○小篠委員

小篠です。

今日はオンラインで参加させていただいています。

提示されたタイトルがなかなか難しいなと思いながら聞いていましたが、今後20年の

都心の目指す姿を考えながら、実効性のある計画論としていくということなのだろうと思います。

資料の11ページに「新たな価値の創造」というキーワードがございますが、私はこれが一番気になりました。ここには、新しい技術を使ってどういう新しい価値を創造するのかということが大きく書かれていますが、新しい価値の創造という文言を読んだときに、もっと根本的に新しい価値をどういうふうを考えなければいけないのかというところをテーマに置く必要があるのではないかと思うわけです。

私は、今、空知管内の小学校の廃校跡地に建っている新しい施設の中にいるのですけれども、ここで目にしているのは大きく広がっている水田や背景の山並みで、そこに近代的で非常に多くの集客を得ている施設ができているのです。

新しい価値というのは、例えば、ほかの都市と競争する中で、他の都市にはあって自分にはないもの、足りなかったものがあるから、それをどのように作るのかを考えて作っていく、そういう計画論が先行していたと思うのです。それは決して駄目なものではなく、ニーズがあったわけで、決して批判的に言っているわけではないのですが、人口減少局面に入っていくこれからの20年、30年を考えていったときに、ずっと同じやり方で計画を立てていったいいのだろうかということです。

例えば、今、観光の話がありましたけれども、札幌らしいと思えるような観光の場所が都心の中にどれだけ多く存在しているかということ、あまり思い当たらないのです。どこの都市にもあるような空間が集積して都心が構成されている感じがします。さらに駅前を中心に再開発が進んでいくのですが、札幌らしい中身が詰まった空間が生み出されていくのだろうかというところが非常に気になっていて、そのようなことをこのままずっと続けていくことの限界を感じます。

先ほど、ほかの地域との競争の中で観光が生まれているのではないかという話もありましたけれども、そんなことばかり考えて他の都市と同じようなものを取りそろえていくのではしょうがないと考えています。

そうしたときに、例えば、愛甲委員たちと一緒にやらせていただいておりますが、オープンスペースをどのように位置づけ直すのかということがすごく重要になってくると思います。札幌ぐらいの規模のまちであれば、そんなに密度を高めていくことが本当に正しいやり方なのかということをよく考えて進められたらいいと思います。

ある程度の数値を具体的な評価指標として案出し、適切な空隙が魅力につながる都市空間に対する評価を具体的にできないか、要は、都心の密度を上げることで経済的な効果を含めて全てを回していくという計画論だけが答えなのか、本当に東京などのような大都市圏と同じように開発していくことが果たして正しいのかどうかというところを考えなくていいのか、これが私の一番話したい点でした。

○高野委員

20年先の都心部ということで、20年前を考えてみると2004年です。2004年

から今までを思いつくまに挙げると、例えば、2011年にチ・カ・ホができ、札幌駅からすすきのまでつながる地下空間が出来上がったので、ここに集まる人がすごく増えたということがあると思います。その後、市民交流プラザもできて、今日も見てみると、そこに座ろうかなと思ってもほとんど空いていないという状況で、いつもフリースペースを使う人がいるということがあります。さらに、ポロクルというものができて、都心内の移動手段としてかなり活用されているというところがあると思います。

それから、20年前も携帯電話やPHSがあったわけですが、今はかなり進んで、情報化といいますか、携帯電話やスマホが必須のものになり、高齢者を含めて当たり前になってきて、かなりの用事をスマホで済ませています。買物もそうですし、情報取得もスマホとかネットということが20年前に比べてかなり進んだと思います。

一方では、そういうふうに常に情報を取得できる、情報に触れられるということの裏返しで、例えば、家で仕事をしないでこういうところに来て仕事をするとか、スタバで仕事をするというように、情報化があまりに進むと、情報と隔絶して自分の仕事をするとか、本を読むとか、情報からあえて隔絶するような世界が作れるという都心機能もかなりクローズアップされてきたのかなと思います。

そういう20年間を見て、将来的な20年というと2044年です。その中間年の2034年は新幹線がまだかなというあたりでしょうか。2034年に数年を足すと新幹線ができるという話がこれから出てくるとは思うのですが、大分先ですね。

ただ、逆に言うと、駅前のバスターミナルがなくなったので、寒空の下でバスを待っている人がたくさんいたり、駅前の商業施設が本当に少なくなってしまったり、この十数年間は、ある意味、札幌駅周辺は不遇の時代を迎えてしまいます。そのカバーということも考えていかないと、札幌駅前地区は誰も見向きもしなくなってしまうかもしれない。ここからの10年間でそういう非常に不遇の時代を迎えてしまうことも考えられるなと思います。

人口減少というお話もされておられまして、札幌も人口減少時代に入りますけれども、道内の他の市町村はもっと厳しい人口減少時代を迎えてしまうということです。特に数千人あるいは1万人、2万人といったようなまちではサービスがすごく低下してしまい、教育や生活、文化、医療、いろいろな面で北海道内の市町村の人口減少によるサービスの低下というのは大きいわけです。

そういう意味では、今はあまり使う人がいないですけれども、道都という札幌の位置づけとしては、例えば、教育では札幌の屯田をベースに道内の高校に授業を配信するサービスがありますし、地方にいと勉強したくても自分の思うような教育環境がなかなか得られないという中学生、高校生なんかに、札幌として、札幌でなくてもいいのかもしれないけれども、道内のそういうサービスを、あるいは、医療なども含めて提供することも今まで以上に求められてくるように思うのです。

そういうような10年先を見据えながら、求められている機能、特に都心部では情報化

がこれからますます進む中で、人々の孤立といいますか、情報と人の行動が代替関係にあるのか補完関係にあるのかは昔から議論があったのですけれども、どちらというわけでもなくて、情報を見たら行かなくても満足するというわけではなくて、いろいろな情報を得ると、例えば聖地巡礼とか、どうしても訪ねてみたいということもあって、補完関係というのかなり大きいわけです。

そういう人の取り込みなどもしながら、情報化が進む中で、サードプレイスというか、情報からちょっと隔絶して自分を自分として保ってられる場所とか、逆に、情報を通じてではなく直接的に交流するというような機能が必要で、最近、女性がスナックに行くというのがはやっているそうなのですが、それもそういうような現象だと思います。情報過多の中で人が交流する機能というのを今まで以上に都心として編み出していかなくてはいけないのかなというふうに思います。

また、ポロクルというのは便利なシステムですけれども、インバウンドの方は大きなスーツケースを持って地下鉄の切符を買いに並んだりしています。今日の報道ではクレジットカードでも地下鉄に乗られるようにするというのが出ていましたけれども、もっとインバウンドの方がスムーズに都心を移動できるような手段も必要になってくるのだと思います。

そういった20年先を見据えて必要とされるもろもろの事柄を、一つは日本人の物すごく急激な人口減少、それから、もう一つは、カーボンニュートラルといいますか、カーボンネガティブ、ネイチャーポジティブというか、これは今までハイブリッド車に乗ってみましょうとか、LEDに替えてみましょうとか、前よりちょっとましな行動するといったような時代ではなくて、二酸化炭素の排出量を減らすとともに、逆に、吸収する仕組みを作ってニュートラルを保っていくということがこれからは本格的に求められる時代になると思うので、人口減少とカーボンニュートラルというものを大きな制約条件としながら、これから求められるいろいろな機能を満たしていく必要があるというのがこの都心まちづくり計画、さらにはエネルギー計画ということになるのではないかなと思います。

○東委員

三井不動産の東でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

私は、2年前の2022年4月に北海道に着任いたしまして、3年目の札幌生活を迎えております。こちらに参ります前は、ホテルリゾートの開発・運営を9年、その前は、中国と東南アジアで当社がマンション事業をやっていく上での現地のパートナー企業を探すという仕事を2年、その前に会社の経営企画部に5年おりました、入社してから17年間はオフィスビルの開発、営業、運営をしておりました。

私が所属しております三井不動産は、国内外でいろいろな開発に関与させていただいておまして、私もこちらに参りまして札幌の中で何か新しい開発ができないかなということとで日夜いろいろ考えております。

そうした中で、今回、このまちづくり計画の資料を拝見させていただいて、札幌市が考

えていらっしゃる内容は機能的にはかなりの範囲を体系的、網羅的にカバーしていらっしゃるなというふうに感じまして、感心していたところであります。

一方で、もう少しこういう要素があったほうがいいかなと感じましたのは、何人かの委員の方からご指摘のありました観光という要素です。

今、私どもが世界中で事業展開をしております中で、どのまちも世界中から人を集めるということを最大の目標にしております。先進国で人口が減らない国はアメリカ以外ありませんので、皆さん、移民で何とか成長を続けていこうというふうに考えているのが今の先進国の実態です。

そうした中で、札幌の人口減少は世界平均よりも早いスピードで進みますけれども、国内外から人をたくさん集める魅力のあるまちであることで、生産性を伸ばす、あるいは、低下を食い止めるということにこれから挑戦していかなければいけないというのが我々の置かれている立場なのではないかというふうに考えております。

ですから、あえてこのまちづくり計画の中に何か加えるとしたら、もちろん市民の方が行きたくなる都心という着眼点も大事ですけれども、世界中から人が行きたくなるまちにして、なおかつ、地域の社会課題の解決を目指すまちというところが大事なのかなというふうに感じているところでございます。

それから、議論の事項の2点目にございましたそれを実現するために必要な視点ということで幾つか申し上げさせていただきます。

今、三井不動産では、日本橋で、ライフサイエンスの企業や研究機関をたくさん集めたり、JAXAなどを中心に宇宙開発を目指そうという起業家の方を集めたりという動きをしております。

それは、日本橋のまちづくりという目標も一つあるのですが、人口が減り、GTPが伸び悩む国で不動産が成長するというのは世界の投資家から見るとなかなか考えづらいことですので、日本に産業創出力があるということを示さないと、いくら単独の企業が日本で頑張ったところで世界が競争している中では知れているという考え方を持っておりまして、そういったことを手がけなければいけないなということでやっているのです。

その中で一番大事なのは、箱を作っても駄目なので、どうやってそういう人たちが集まってコミュニティーを活性化させて、アクセラレートと言い過ぎではないかと思いますが、議論を活発化させて皆さんが前に動けるか、できればエコシステムをしっかりと作っていくということをしていく必要があるのかなというふうなことで、私どもの社員も決して多くはないのですが、社員の数%をそこに投入して、そういったことに真剣に取り組もうということをやっているところでです。

ですので、このまちづくり計画の中に実効性を高めるためには、まちづくり会社があるように、ああいう組織があることで誰かが真剣にまちづくりのことを考えて実行するという機能が生まれているわけです。

例えば、新産業を創造するときに、どこに誰をどうやってプロモートしていくのがいい

のかを考え、コミュニティーを形成したりエコシステムを構築したりするという役割を担う人たちをしっかりと置く、あるいは、招致するということを手がけられることが大事なのかなというふうに考えております。

○井上委員

三菱地所の井上でございます。

私は、今まで20年ぐらい東京駅前の丸の内を中心としたエリアの開発やまちづくりに関わっております。

そういった中では、三菱地所の丸の内のまちづくりというのは、私どもが持っている土地だけではなくて、周りの地権者の方などと一緒にまちづくりの将来像を考えて、それを行政と一緒に作り上げていこうということ、いわゆる、パブリック・プライベート・パートナーシップに基づいたまちづくりを少しずつ続けてきて、35年ぐらいたっているのですけれども、そういうことをやってきました。

今回、札幌の都心のまちづくりということをもう一回考え直そうというところで、私が思うに、例えば、20年後を考えたときに、札幌が北海道の中でどういう位置づけになっていくのか、あるいは、何を売りにしていくのかというところを考える必要があるのかなと思っています。

私どもがやっている丸の内も、東京もあちこちで新しい開発が起きたりしています。それぞれが目立つことをやる中で、東京の中で丸の内はどのような位置づけになり得るのだと、どこも同じようなものであると東京自体も飽きられるし、その中で丸の内は何を差別化できるのだということがあると思うのです。

そう考えると、北海道は、一見、札幌の独り勝ちのようにも見えますけれども、でも、言葉だけで言えば同じようなことをほかのエリアでやろうとすればこれからできるかもしれないということになります。

例えば、新千歳空港のそばに半導体の工場ができますと、そこで働く人たちがどこに住むのですかとか、どこで研究するのですかという話をしたときに、その人たちはどこに行けばいいのでしょうかということになると、札幌、千歳、苫小牧の中のどこなのか、あるいは、やがて来るであろう新幹線（沿線）の中のどこなのだという、北海道の中でもいろいろなところがある中で、札幌の強みは何なのだというのを20年後に向けてしっかり作っていく必要があるのかなと思います。

もちろん、今現在は、札幌が一番人が集まっているところですし、お店もあるし会社もあるということだと思いますけれども、そのままでいいのか、もっと伸ばすところがあるのではないかと思います。

私は、北海道全体というのは非常に魅力的だと思っています。地球規模で言えば決していいことではないかもしれませんが、地球温暖化の影響により北海道でおいしい食べ物やお酒ができるので1次産業的にも非常に注目されています。また、先ほどから言葉として出てきていますGXの点でも、北海道というのはこれだけ森林があり、そういう現場を抱

えているということで、カーボンニュートラルに対して実際の行動がしやすいエリアですので、多分、今後産業が立地していくときに、再生可能エネルギーを比較的容易に活用できるところが注目される可能性はあると思います。これは東京ではなかなかできないことで、議論はできても実際に活動するのは北海道だよねという話にもなりかねないなというふうにも思います。そういう状況の中で、北海道は何をできる場にしておくのかということだと思います。

そういった意味で、先ほど観光の話も出ていましたけれども、いろいろな人に来てもらうというのはすごく大事なことであって、来た人たちが北海道や札幌の魅力に気づいて、それをさらにビジネスの魅力として捉えられるかどうかということが今後の都市の成長力に関わってくるのかなと思います。

一方で、ここに暮らしている方の目線から見ると、今、観光客が増え過ぎてオーバーツーリズムという話が日本のあちこちでも出ていますから、ここに住んでいる方にも過しやすい都心であるべきだということで、そこをどう両立させるかというのはすごく大事な話です。

いろいろな都市の軸とか拠点でめり張りをつけて、ここはにぎやかな場所、ここはもっとくつろげる場所とか、そういったものをはっきりと出していくことは必要ですし、恐らく、その中でグリーンというものの持つ意味というのは非常に大きいと思います。

また、エネルギーとしての再生可能エネルギーを含めた北海道としての魅力をうまく都市として出していけるかというのが非常に大きな一つの方向性になるのかなと思います。

○内川委員

札幌駅前通まちづくり会社の内川です。

まとめていただいた資料を拝見いたしました。私が駅前通地区でエリアマネジメントを進めていく中で、今までの第2次都心まちづくり計画というのは、より地域に落とし込むための指標となるような計画というふうに位置づけていて、第3次都心まちづくり計画も、来街者の目線と住民の目線とありましたけれども、都心に愛着を持ってもらうために進めていくための計画というふうに私としては位置づけているので、様々な視点が網羅されているので、よいのかなというふうに思っていました。

実際、私が担当しているオープンスペースの活用や地下空間の活用という視点でいきますと、いろいろな活用はされているのですが、市民の皆様が活用していくパターンが増えてきています。また札幌は、イベントをやっていただける事業者の皆さんからしても、こういう自由に使える空間が本当に多いエリアだというふうに言っていたいて、よそから見てもオープンスペースが増えてきているということがすごく重要な視点だなと思っています。

先ほど愛甲委員がにぎわいと都心居住のバランスというものをお話しされていましたが、にぎわい一辺倒というか、イベント一辺倒というわけにもいけないと思いますし、その辺のバランスは私たちも一番気にしている部分でもあるので、そういった視点は必要だなと

思いながら伺いしておりました。

見ていて思ったのは、ライフスタイルの嗜好の変化みたいな感じのことはあるのですけれども、文化とかの視点があまりないのかなということです。私も十数年前に札幌に来てから、札幌はいろいろなアートや芸術といった視点をちゃんとまちづくりに取り入れている点がすごいところだと感じていました。創造都市さっぽろを象徴的に発信する場のように創世スクエアは位置づけられていると思うのですが、今後の課題として人と情報と技術というのもありますけれども、そこに文化みたいなことも足していただいたほうがよいのかなと思います。文化を作れば、教育などにもつなげられるのではないかなというふうに思いながら聞いておりました。

産業の話も出てくると思うのですが、都心でこれだけ人が歩いていると、社会実験や実証実験をしたいというお声もたくさんいただきます。ただ、一つのまちづくり会社だけではそれが受け入れ切れていないというのもまた事実でして、やりたいけれども、対応するほうの人間も少ないところもあります。

先ほどから、コミュニティやエコシステムを作ったらという話もありましたけれども、まちの中で社会実験を受け入れていき、ちゃんと受け入れる都市と標榜することによって新しい技術や産業が生まれたりするほうに進んでいけるのではないかなと思ったので、そういう視点も入れたらよいと思いました。

○榎本委員

榎本です。

今日、私は福岡から参りました。2010年ぐらいに福岡の都心部のまちづくりが始まったときは、札幌の都心のまちづくりは先進事例なので、我々は何度も勉強しに来て、天神のまちづくりの多くは札幌のことをコピーしてやっているところがあるので、少しでも恩返しをしたいなというふうに思っています。

まちづくりが胎動してきた福岡が14年後の今どうなっているかという、皆さんもご承知かもしれませんが、天神ビッグバンという政策パッケージで時限的に大規模な開発が複数動いております。何が見えてきたかという、時限的に大量に床供給があっても、コロナ禍もあったのですけれども、外部からなかなか需要が獲得できておらず、域内移転でオフィスが福岡市内から都心部に動いてしまうということも発生しています。

一方で、私は、今、広島の都心部のまちづくりにも関わらせていただいています。広島で何が起きているかという、福岡と全く逆で、今度は、全く需要がないので、中小のビルもまとまらないし、高水準のスペックのビルを建てたところで大型オフィスビルの坪単価が2万円を超えるようなことは起きておらず、1万5,000円程度からなかなか上がっていかないというようなことが広島の課題になっています。

ですから、福岡、広島で状況は違いますが、共通の課題は需要を創出していくことだろうと思っているので、都市開発と産業政策は両輪でやっていくというような視点をぜひ論点1のところに加えていただきたいなというふうに思っています。

池田委員と東委員のコメントにもありましたスタートアップエコシステムの創造もそうだと思いますが、スタートアップがワンフロアをワンスパンで借りてくれるような事業まで育つというのは時間がかかることなので、多分、産業創出と企業誘致とスタートアップなりエコシステムの創造はいろいろなレイヤーで取り組んでいかなければいけないと思っています。

これは都市セクターだけで済む話ではないので、産業セクターとも連携していかなければいけないと思いますが、ぜひ、経済を活性化するような産業政策と両輪でやっていくという視点を加えていただきたいというのが1点目です。

次に、論点1と論点2が重なりますが、リノベーションの件です。

福岡は容積緩和型の都市開発で大規模な都市開発を進めてきていますが、人口減少などを見据えると、大規模にばんばん新築を建てるのかというのが一つ論点かなと思っていて、これからはリノベーションをうまく使っていかなければいけないだろうなと思っています。しかし、リノベーションをうまく使いこなすための制度的な支援や金融的な支援が現状ではないのではないかなと思っています。

我々が福岡でまちづくりをしているときに札幌で上手だなと思っていたのは、行政が先行的に公共投資を行うことで民間投資を促してきたということでした。そこがポイントだと思っているので、リノベーションに関しても、需要の創出とともに、新築ではなくてリノベーションをして付加価値をつけていくみたいなことを行政からの支援として、実現性を高める取組として埋め込めるとよいのではないかなと思っています。

例示ですが、コロナ禍前にトロントに伺ったときに、当時、グーグルのサイドウオーク・ラボと一緒にスマートシティーをやっていましたけれども、トロント市は、ウォーターフロントで大規模にグーグルに都市開発、スマートシティーをやってもらうということと併せて、スマートシティーの技術を使って環境改善をして歴史的な倉庫や資産をもう少しモダンに活用していき、インキュベーションの施設やギャラリー、オフィスにして、気持ちよく働きたい人を呼び込んでいこうと考えているという話を伺いました。

ですから、リノベーションもいろいろな需要を引きつける可能性があるものだと思うので、ぜひその辺も考えていただきたいなというふうに思っています。

論点の二つ目のところで1点あります。

計画を立てたから物が動くわけではないので、物を動かすための仕組みを入れていくのが必要かなと思っています。内川委員がおっしゃったように、社会実験の仕組みをきちんと入れていき、その中できちんと制度とかルールとかを作っていく、ニーズを検証していくみたいなことは計画づくりと並行してやっていかなければいけないことだと思います。そういった動きが部会からも出てくるといいなと思っていますし、その計画と一緒に並行して進んでいくといいなと思っています。

それから、エリマネとの関係も非常に重要だと思っています。福岡は、エリマネの事業計画はかなり行政計画を意識して作り、官民が協働で事業を行うための協議やプロジェク

トの組成などを一緒にやっています。社会実験と併せて、官民の連携事業が少しでも起きていくような取組が計画づくりと並行して起きていくとよいと考えています。

○後藤委員

UR都市機構の後藤と申します。

私もUR都市機構は、あまり有名ではないのですけれども、団地なども幾つかありまして、市内に5,000戸ほどの賃貸住宅を管理、運営しておりましたり、創世スクエアの再開発事業をやるときに事務局をさせていただいたりしております。私たち自身の事務所も構えておりますし、札幌のまちがよくなることは私たちの組織としてもよくなるということで、自分ごととして取り組んでいるところでございます。委員にさせていただきまして、大変光栄に思っています。

資料を拝見させていただいて、大変分かりやすくまとめられていて、私自身も頭の整理ができました。

細かいことを申し上げますが、資料の7ページや8ページにこれまでの政策と今後の課題の見取りが非常に分かりやすくなっているのですけれども、なぜこういう課題認識なのかというところの説明がはしょられているように見受けられました。課題の手前に現時点の評価や振り返りがあると、今後、市民のご意見を聞く際にも有用ではないかなと思いました。

次に、今日のお題は20年後の将来像を描くための視点ということですが、11ページの論点の四つは大変分かりやすいのですが、委員の皆さんもご指摘のとおり、論点の一番下にある新しい価値の創造だけソフトウェア的な話だと思います。ここは、私たちも全国でまちづくりのお手伝いをしている中でいつも悩むところでございまして、どの都市でも模索しているところなのですが、手がかりとしては、札幌ならではの、札幌の優位性は何かということだと思います。

大学の集積があり、北大などは都心に極めて近いところにあるということで、先ほどの文化の視点という話に近いのですけれども、大学とのまちづくりの連携といいますか、産業創出とかイノベーションで、学の部分との連携という視点もあればよいと思います。

また、二つ目の実効性のための視点につきましては、昨今の金利の上昇基調や建設費の高騰も短期的な話ではあるのですけれども、新規事業の投資に関してはマイナスでございまして、それを打ち破るような政策、金融的あるいは税制的な緩和のようなことももしかしたら視点として要るかなと思いました。

○中山委員（代理）

日本政策投資銀行の中山です。

本日は次長の三浦の代理で出席させていただきますが、簡単に意見を述べさせていただきます。

私自身は、2019年に北海道に赴任してきて丸5年ぐらいが経つのですが、実は若い

時分、2010年にも北海道、札幌に来たことがありました。先ほどチ・カ・ホのお話がありましたけれども、個人的にも、この十何年かで札幌の駅前通を中心に大分雰囲気が変わったと感じているところがございます。

そういった中で、今回、さらにその20年先を描こうという話なので、私の乏しい想像力ではなかなか思いつかない部分もあるのですけれども、自分なりにいただいた論点についてコメントをさせていただければと思います。

まず、1個目の20年先に何をを目指すかというところについてです。

各委員の方からもいろいろな視点でご意見があったかと思います。先ほど井上委員もおっしゃったかと思いますけれども、日本、世界のいろいろなところで都心のまちづくりをどうするという議論がある中で、結果として金太郎あめみたいな話になったら意味がないと思うので、札幌らしさというところをどう考えるかは一つあると思っています。

加えて、今回の都心のまちづくりということでいくと、都心といっても多分幾つかのエリアがある中で、各エリアの機能やコンセプトみたいなものもしっかりと明確にしていけないと、都心全体の中で同じようなことがいろいろなところで起こるというのはあまりよくないのかなと思っています。もともとのまち並みなり、まちの位置づけみたいなものも踏まえながら、先ほど文化だったり自然だったりというお話もあった中で、各エリアの機能を踏まえてどういうところにしていくのかをしっかりと考えていく必要があるのかなというふうに思っております。

1点目に戻って、札幌らしさというのは何かというのは私自身も十二分には理解できていないのですが、確かに、先ほど来お話があったようにユニークな部分としては、いわゆるオフィス的な部分と観光都市としての機能がかなり両立したまちなのかなと感じているところです。

今は、オフィスにしても観光にしても、若い人を中心に価値観が変わり、サステナビリティが意識されている中においては、サステナブルなまちというのが札幌においては何なのだというところを考える必要があるかなと思っております。そういう中では、先ほどお話があった脱炭素は重要なかなと思っています。

ただ、正直に申し上げますと、今、脱炭素、燃料転換を進めていくにせよ、新しく建物を再開発をするにせよ、先ほどお話があったように資材価格が上がったり金利が上がったりということの中で、非常にコストのかかる話だとは思いますが。ですから、回収という言い方が適切か分かりませんが、お金がかかる部分をどう負担していくのかといったところも当然必要な視点かなと思っておりますし、そういった中においては、受益者負担というものをどういうふうに切り分けるかといったところもまちづくりの中においては考えなければいけない話なのかなと思っております。

いろいろなパターンがあるのかなと思っています。新しく作るのではなくて、先ほどあったようにリノベーションというようなことの中でコストを抑えていくということもあると思いますし、その辺りも含めてサステナブルなまちをどう作っていくかというのを考

える必要があるかなと思いました。

○オブザーバー（草野）

札幌開発建設部の草野と申します。

今回、委員の皆様方の貴重なお話を聞かせていただけるこの会に参加させていただきまして、どうもありがとうございます。

札幌開発建設部は、道路事業としては国道の管理、改良などを行っておりますけれども、その中で、最近は大規模なプロジェクトが始まっておりまして、一つ目は創成川通のバイパス事業であります都心アクセス道路、二つ目は新たな交通結節点となります札幌駅の交通ターミナル整備事業です。今、これらの事業の設計を進めているところでございます。

これらの事業は、現在の交通課題を解消するためというところが一番大きなところで立ち上がったところでございまして、ただ、将来の札幌の都心まちづくりにとってよりよいものや一助となるためには、将来をなるべく見据えて、時代背景や、人やニーズのどんな移り変わりがあるのか、今後技術の進展がどれくらい進むのか、例えば、自動運転の普及では、今、道内各地でも少しずつ実証実験などが行われているところなのでは、どのような本格的な導入がなされるかというようなところをしっかりと見据えながら、なるべくそういう観点も踏まえていきながら、進めていかなければならないと思ったところでございます。

一般の議論のポイントについて、申し上げさせていただきますが、これまで高速道路をはじめとして、道路整備が進められてきたところですが、全国的なデータでは、国土に占める道路の面積の割合が3%、これは秋田県に相当する面積ということでございまして、かなり大きいものと私は認識しております。

これらの道路空間をいかに今後を見据えて使いやすいように活用していくかという流れにもなってきております。にぎわいづくりにどう生かすか、歩行者、自転車といった道路の利用者がいかに安全に安心して楽しく利用できるかという視点で、例えば、無電柱化や自転車の走行空間の整備など、いろいろな道路施策が北海道だけではなくて全国的に行われてきているところでございます。

そんな中で、札幌市は、現在でも歩いている方々が道内の中ではかなり多く、ポロクルをはじめとして自転車の利用者がたくさんいると思っており、今後、人口減少が進むといっても、これら歩行者や自転車に乗る人が全然いなくなるということは考えにくいと思います。

資料にも、今後の方向性として街路空間の再構築ということが載っているところでございますが、道路をはじめとした空間の再整備によって、数年、数十年後にどういう利用者がどのくらい満足して使っていただけるかという視点は重要だと思っておりますので、こういうところも進めていっていただければと思ったところでございます。

○村木座長

ありがとうございました。

では、私からも最後に一言だけ申し上げさせていただきたいと思います。

今回のこの計画について、私が思ったのは大きくは2点です。

まず一つが、都心まちづくり計画とエネルギーマスタープランという別々のものを一体化することのメリットは何なのかをもっと考えていく必要があるなという感じがしています。今日の資料も、都心まちづくり計画は何をやってきました、マスタープランはこうなってきました、そして、11ページにそれぞれの課題が出ているのですけれども、基本的に分野別になっているのです。

分野別になっていると相乗効果というふうにならなくて、煙突型に横串を刺したら結果論としてどんないいことがあるのかというのが見える話になっていかないといけないのではないのかなと思います。20年で札幌の都市が目指す姿というのは、縦ではなくて横もやりますというのが見えるものにしないといけないのではないのかなというのがまず思ったことです。

恐らく、今日お集まりの方々は皆さんご自身の専門があって、そこから波及されたことをおっしゃっていただいた方々もたくさんいらっしゃるのですけれども、多分、私たちは、波及効果とは何なのかというのをもっと考えていかないといけないのだろうなという感じがいたしました。

二つ目は、エネルギーのマスタープランをやらせていただいていたと思いますが、マスタープランで政策、計画は作るけれども、事業計画としてのアクションプランがあって、目標値の達成がどうだったかという評価をかなり一生懸命考えてきたということがありました。そうすると、先ほども実現という話があったと思うのですけれども、都心まちづくり計画で書かれていることをどのように評価していけばいいのかということがすごく大事になってくるのだと思います。

その際に、11ページにも「新たな価値の創造」とありますが、新たな価値はどうやって評価すればいいのか、これは多分評価の仕方がすごく難しくて、二酸化炭素排出量みたいな数字で出るかということと必ずしもそうでもないと思いますし、新たな価値が何かというのは明確にしないと、それをどう評価していいか分からないということになるのかなと思います。

先日、国交省のスマートシティーの事業の採択を考える際にどういうことをやっていけばいいのかという委員会をやっていたのですが、そのときにロジックモデルを考えるというのをやってもらおうということになりました。やってみると、何が大事だとか、どれとどれが関係するということを考えることになるので、札幌都心の価値を考えるときには、価値の向上はどんなことがあってアクションとして最終的にどう降りてくるのかというのを考えていくことも、もしかすると必要になってくるのかもしれないなと思いました。

しかしながら、すごくいろいろなご意見があって、キーワードでもすごく大事なことがあったと思います。20年は、長期計画でありながら、意外と結構すぐ経つかもしれませ

んし、人が休めるとか、気候を考えると、それは水のこともあるかもしれませんし、発展のためには域内の経済波及効果、つまり、ただの都心の建て替えだけではなくて、どうやってお金と物が動いて人が集まるようになるのか、そして、人というのが市民だけではなくて、観光という産業も含めて北海道の発展を検討していかないといけないということではないかと思いました。

私がもう一つ大事だと思ったのは、高野委員がおっしゃっていた都心不遇の時代にどう対応していくのかです。

駅前が寂しい状況の中での対応がもしかすると内川委員がおっしゃっていた実験をやりながら価値を追加していくことなのかもしれないなと思ったりしたので、皆さんからいろいろなお知恵をいただきながら、この後、議論をしていただく機会が増えていけばいいなと思います。

もう少しお時間があるのですが、何か追加で言いたいことがある方はいらっしゃいませんか。

○高野委員

都心不遇というのは言い過ぎだったかもしれません。

そうは言いながら、2035年から36年に新幹線がオープンというところだと思いますけれども、2030年には駅前ターミナルも出来上がるということを札幌市はおっしゃっていますし、国交省も2030年には出来上がるというお話だったと思うのですけれども、その間、2030年とすると6年間あります。

例えば、吹雪の中で都市間バスを待っている人を想像したときに、すぐにできることもあるのかなと思います。民間ビルの中に少し入っていただいて、バスが来たらそこからすっと抜けていくとか、6年間のために物を作るというのは大変だと思いますが、そういうやり方はできるのかもしれないと思います。

その辺は、今までと全く違う発想でやっていくことが必要だと思いますし、この間をどうつないでいくか、その間にどう新しいものを考えていくかということにすごく意味があるかなということで、札幌駅前地区の不遇の時代と言ってしまったところです。

○村木座長

もしかすると、不遇の状況下でどういう新しい関係みたいなものを作れるのは実験かもしれないですね。今まで使えなかった空間の活用とか、公的空間でとても使いにくかったものをどうやってうまく連携させるかとか、そういう新しいことができるといいなというふうに思いました。

コロナ禍が明けてアメリカに行ったらパークレットがすごく増えていて、道路の活用がすごく増えていました。札幌の都心でも、駅前が寂しい時代に新しい使い方のようなものができる、新しい仕組みができるかもしれないですね。

そんなことも含めて議論できればいいのですが、何か追加である方はいませんか。

(「なし」と発言する者あり)

○村木座長

事務局は今聞かれていてどうでしたか。

○事務局（稲垣都心まちづくり推進室長）

都心まちづくり推進室長の稲垣でございます。

貴重なご意見かつ幅広いコメントをいただき、我々としても非常に勉強させていただいてるなと思いながら拝聴しておりました。

繰り返しになりますが、まず、今回の計画の見直しに至ったきっかけを再度申し上げておきます。

我々都心まちづくり推進室ができて大体20年になり、組織としても成人を迎え、大人の組織として様々なことに一通り取り組んできた中であって、一方で、札幌の人口が減少期に入り、上位計画も見直され、社会全体が大きな方向転換にあるという潮の変わり目にあるという二つのことを考えたときに、もう一度、都心まちづくりの現在地を再確認し、長くを見渡して、今何をすべきかということをしっかりと考え直すことがとても大事だということを室内でも何度も議論していました。

都心エネルギーマスタープランと都心まちづくり計画の二つがありますけれども、二つの計画だという既往の枠組みを一旦取り払って、最終的には一つのマスタープランとして統合することを視野に、もう一度、これまでの取組とこれからの取組を総ざらいしたいという問題意識で今回の計画見直しに着手したという経緯でございます。

そういった問題意識に照らしながら、各委員のご意見をお聞きしますと、これからの20年に何が起きるかということを過去も再確認しながらしっかり見通すことの重要性ということを改めて感じました。また、最後の論点になった不遇の時代というキーワードも出しましたけれども、そこが無視できない期間としてしっかりあることも認識しながら取組をしっかり組み立てていく必要があるなというふうに思ったところです。

小篠委員もおっしゃっていましたが、これまでのように規模拡大、大規模開発、拠点型、機能集積という従来の手法では解決できないこと、新たな価値が生み出せないということもたくさんあるのだろうなと思っております。

本日もいろいろなキーワードをいただいたと思っていますので、様々な視点でしっかり掘り下げながら、かつ、分野別の縦割りの計画ではなくて、横串のメリットを出すということもしっかり頭に置きながらこれからの検討を深めていきたいなと思った次第です。

そういう意味で、二つの部会を置かせていただきたいということで今回ご提案させていただいていまして、深掘りをする必要があるテーマとして二つを抽出して、歩きたくなるまちづくり、そして、エネルギーということを置いていますけれども、あくまでそれぞれ深掘りをしたいということであって、ばらばらに立てるということではありません。

それぞれの部会の議論も深めさせていただきながら、その成果はしっかり全体の検討会にフィードバックさせていただいて、全体として統合メリットを出すような形で議論を進

めていければなというふうに思っております。

これから2か年度になりますけれども、引き続き様々なご意見をいただければなと思った次第です。

非常に一般的なコメントになりましたけれども、現段階では以上でございます。

○村木座長

ほかにご意見はありませんか。

（「なし」と発言する者あり）

○村木座長

今、室長からありましたように、居心地がよく歩きたくなる都心まちづくりと都心の脱炭素化に向けたエネルギー施策の二つのテーマで部会を作るということなのですけれども、その方向でよろしいでしょうか。

（「異議なし」と発言する者あり）

○村木座長

ありがとうございます。

ほかにご意見がなければ、これで本日の検討会は終了となりますが、よろしいですか。

（「異議なし」と発言する者あり）

○村木座長

それでは、長い時間、ありがとうございました。

進行を事務局にお返しいたします。

5. 閉 会

○事務局（伊関都心まちづくり課長）

村木座長、ありがとうございました。

本日は、多くのご意見をいただきまして、誠にありがとうございます。

我々が検討できなかった、資料にもなかなか書けなかった部分、観光や文化の視点のほか、新しい価値の創出の件、また、評価の仕組みや実効性のある体制づくりについても貴重なご意見をいただいたと思いますので、しっかりとこれから検討に反映させていきたいと考えております。

また、議事録につきましては、皆様に内容のご確認をいただきました上で、後日、ホームページに公開させていただきたいと存じます。

また、二つの各部会につきましては、7月下旬以降を予定しておりまして、順次、開催できるよう調整の上、皆様にご連絡させていただきたいと思っております。

当検討会の第2回目につきましては、事前に皆様にご都合をお伺いしまして、参加者の最も多かった9月17日火曜日午前10時からの2時間の予定で考えております。詳細は改めて事務局からお知らせいたしますが、ご予約の確保をお願いしたいと存じます。

本日は、以上で閉会させていただきたいと思っております。

遠方からお越しいただきました皆様をはじめ、お忙しい中をご出席いただきまして、誠にありがとうございました。

以 上